

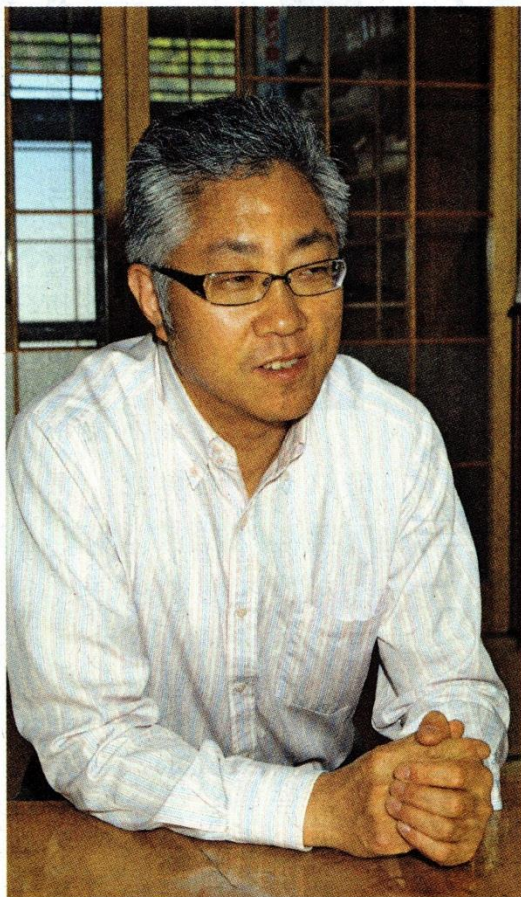
# 馬の歴史生かした地域活性化を目指す

## 「良馬の産地」村の財産

平安時代の和歌に詠まれる「尾駮の駒」。尾駮は六ヶ所村の地名で、鎌倉幕府を開いた武将源頼朝の愛馬「生暖」（いけづき）の出生地ともされる。はるか昔、村から良馬を産出していたとの想定から研究を進め、地域活性化に生かしていこうと昨年、村民有志らで「村『尾駮の駒』歴史研究会」が設立された。会長の相内知昭さんに活動内容や今後の展望を聞いた。（聞き手・内沢浩）

尾駮の駒の研究はいつから始まったのか。10年ほど前、歴史をまちづくりの生かせないか、地元之宝を見つけたと考え、村史を調べたのが始まりだ。平安時代の貴族の日記など、文献の六ヶ所村など小川原湖周辺の遺跡からは、平安

六ヶ所村「尾駮の駒」歴史研究会 会長 相内 知昭さん



あいない・ともあき 六ヶ所村出身。村内の企業に6年間勤めた後、家業を継いで宗教法人大代表役員に就

### 略歴

任。青森県文化財保護協会会員、村まちづくり協議会実行委員も務める。天理大卒。46歳。

高級貴族の腰帯の飾りと思われるメノウや陶磁器が数多く出土しており、馬を通じて京都と交易があったと推測される。

「そうした歴史をなぜ活性化に生かさそうと考えたのか。その昔、時の都と蝦夷（えみし）の地だった六ヶ所村が繋がっていたと考えた時、歴史のロマンを感じた。これは村民が誇りにしていいと思うし、村の財産として活用してもいいと考えた。六ヶ所はとかく、「エネルギーの村」として知られているが、それだけじゃなく、誇れるものがあることを訴えたい。

硬いテーマだが、村のステータスとしていい素材になると思い、有志を

尾駮の駒も野飼ふには懐くものかは」詠人不知一。尾駮の駒は、荒馬としてよく平安時代の和歌に登場する。平家物語には生暖の体高が4尺8寸（約1.5m）と記載。そのころの馬はポニーほどの大きさがなく、当時では大型だったとされる。体格のいい尾駮の駒は、在来馬と大陸から渡ってきたアラブ種との掛け合わせでできたのではないかと、との説がある。

## 真実性究め「魅力」発信へ

### 時代を



集め、昨春、研究会の設立にこぎ着けた。

「これまでの活動内容と成果は。時代背景を知るため、勉強会を開催したり、京都の神社を視察して共同理解を深めている。その後、馬肉料理を中心とする弁当開発に取り組み、販売にこぎ着けたほか、今年4月には初の報告会も開いた。徐々に私たちの活動を受け入れてくれるようになったと感じている。設立当時は15人だった会員が、今では25人に増えた。顔触れも会社役員や学校長らさまざま。

「活動の展望と課題は。今後、フォーラム開催などを計画している。より多くの村民に理解してもらうため、講演などを通じて真実性を一層、究め、尾駮の駒にまつわる「魅力」をさらに発掘し、発信していきたい。

将来的にはこうした歴史に興味のある人たちが村に呼び込みたい。私案だが、資料の展示や情報を発信できるような施設の整備が必要と考える。そのために、今後の研究をさらに進め、この素材を磨いていかなければならない。現在、学校で授業に取り入れる話も出ています。学校教育へのサポートは、研究会としても惜しまないつもりだ。